

家庭教育の忘れもの

家庭教育の忘れもの

現場教師から母親へ ● 田中館貢橘

日本教文社

著者紹介

大正13年岩手県に生れる。東京学芸大学卒業後、有賀正助、柏木俊雄の両氏に師事して作曲を専攻。東京芸術大学派遣生修了。その後、国学院大学史学科を卒業、小学校、中学校の教師として30数年間教育に携わる。現在、東京都中野区立第八中学校教頭。新教育者連盟講師、日本教育懇話会理事。
著書に『中学生の音楽』（文理書院）。また作曲に「日本の心」その他多数あり。

家庭教育の忘れもの——現場教師から母親へ

昭和53年2月5日 初版発行 定価 950円
昭和56年8月10日 9版発行

著者 た なかだてこうきつ 田中館貢橋 〈検印〉
省略〉

発行人 清都松夫

発行所 株式
会社 日本教文社

〒107 東京都港区赤坂 9-6-44 電話(03)401-9111(代)

© K. Tanakadate 1978 Printed in Japan 振替東京 4-55519

印刷 飯島印刷 製本 笠原製本

乱丁、落丁はお取替します

ISBN4-531-06083-0

はしがき

世は教育の爆発時代といわれ、子供の教育に対する親の熱心さは異常と思われるほどのものがあります。

たしかに、戦中、戦後のあのドサクサの中で教育を受けたわたくしたち親は、現代の子供とは全くちがった環境の中で育ってまいりました。そのために、子供だけはりっぱに育てていきたいという親の願いが、このような教育爆発時代を到来せしめたのだと思います。

しかし、このような異常な教育熱は、ややもすると、子供の成績をあげ、少しでもよい学校に進学させればよいのだ、という考えになったり、あるいは、子供を極端に甘やかしてしまうことになりがちです。

1
これでは子供をりっぱな人間として育てるという教育本来の目的からはずれてしまえばかりか、子供の将来を暗くしてしまいます。世の人々のひんしゅくを買っている暴走族をはじめとして、暴力、万引、不純異性交遊、喫煙、飲酒……など、現代の若人の言動は、みな誤った教育熱から生れたのだ、

といってもいい過ぎではないと思います。

このままでは、子供がかわいそうです。いいえ、そればかりではありません。日本の未来に大きなマイナスとなるにちがいありません。

わたくしは、このような立場から、学校教育、社会教育を考える以前の問題として「家庭教育」にスポットをあててみました。というのは、どんなにすばらしい教育が学校、もしくは、社会でなされようと、「家庭」特に「母親」による人間としての基礎教育がりっぱになされていなければ、それらの教育の効率があがるはずがないからです。

そこで、わたくしは、「家庭教育」でまず何をしなくてはならないだろうか、あるいは「母親」として最小限どんな事柄をわきまえていなくてはならないだろうか、という内容を次の順序で書いてみました。

第一部は、現在、一般に正しいと考えられている家庭教育上の問題点で、これを「迷信」ということで、十三の項にしぼってみました。もちろん、ここではその欠陥を十分に指摘できませんでしたが、子供の将来を考えて、これは大変なあやまりだ、と思われるものをひろってみました。

しかし、考えてみますと、現在の家庭教育の中で、ずいぶん多くの間違いが平然となされています。しかも、困ることは、この間違いについて親自身の「自覚症状」がないことです。このために、ここでは内容的にみて少し強い表現でのべてみました。

第二部は、現在の日本の教育、これは家庭教育に限らず、広く教育全体（学校教育、社会教育を含めて）からみてその効率が十分に発揮できない要素を取りあげてみました。ことばをかえていうならば、ここでは世の人々が強くいつている「教育の荒廃」の元凶ともいふべきものを打ち出してみました。

そして、第三部以降で、第一、第二部に対する解決方法、特に、家庭教育をどのようにすべきか、という事柄をのべてみました。

いうまでもなく、ここでのべられていることは不十分な面が少なからずあると思います。しかし、これらはわたくしが三十数年間にわたって得た教育体験と、その実践から生れたものであって、単に、教育学者や評論家の、

「教育とは多分、こういうものであろう」

という調子の推論から生れたものではありません。

このようなわけで、この本は「家庭教育」について主に「お母さん」のため（あるいは、これからお母さんになろうとする人のため）に書いたものです。しかし、一家の主人公である「お父さん」方にも大いに役立つばかりでなく、「先生」方にも、学校での基本的な子供の躾や指導をする上で、大変参考になるものと確信しております。

また、このような教育方法は谷口雅春先生がご唱導の「生命の教育」にその範を得ており、ひいて

はその一助にもなるものと自負しております。

最後に、この本ができ上げるまでにいただいた日本教文社のみなさまからのあたたかいご助言、そしてご厚意を深く感謝すると共に、みなさまからのご叱責とご鞭撻をいただければ幸いと存じます。

昭和五十二年十二月佳日

著 者

目次

はしがき

第一部 迷信十三章

- 1 物的環境を豊かにすれば子供は育つという迷信 11
- 2 テレビや漫画を見せておけば子供は育つという迷信 14
- 3 兄弟姉妹が少ないほうが子供は育つという迷信 17
- 4 老人がいなくとも子供は育つという迷信 20
- 5 型にはめず、好きなことをさせれば子供は育つという迷信 23
- 6 安易なことだけをさせていれば子供は育つという迷信 27
- 7 躾もせず、のびのびさせておけば子供は育つという迷信 30
- 8 ただ、ほめ、もちあげれば子供は育つという迷信 32
- 9 ただ、口やかましくいえば子供は育つという迷信 35
- 10 男も女も同じように教育すれば子供は育つという迷信 39
- 11 塾にいかせたり、家庭教師につかせれば子供は育つという迷信 42

12 父親が家庭奉仕すれば子供は育つという迷信 46

13 国の歴史や家の伝統を知らなくとも子供は育つという迷信 49

第二部 「教育」を阻むもの

1 現代教育はこれでよいか 55／2 経済成長 58／3 情報過多時代

62／4 甘やかし 66／5 技術革新（新奴隷時代） 69／6 成績（点数）

重視の風潮 73

第三部 家庭教育の基礎

I 環境について

1 成績より大切なものは何か 81／2 家庭の道場化 85／3 ワスプの

教育 88／4 最初が肝心 91／5 簡素な生活 95／6 衣（服装）につ

いて 98／7 食について 101／8 住について 107／9 一流のものを与

えよ 112

II 礼儀について

1 ある中学生の自殺 116／2 礼儀作法とは 118／3 ことば遣い 120／

4 あいさつ 125／5 謝辞について 132／6 あやまり方 134

Ⅲ 人生観の基礎固め

1 人生観の基礎 143／2 純潔心 144／3 高貴心 151／4 羞恥心 160／
5 誠実性 166／6 「学ぶ」ということ 177

第四部 現代教育に欠けるもの

戦後教育に欠けるもの 187

I 「不安」に対決せよ

1 佐原君の苦悩 189／2 「不安」からの逃避 197

Ⅱ 「拒否」なきところに教育なし

1 子供のわがままを「拒否」 204／2 子供のいい分を「拒否」 209／3
教師の毅然たる「拒否」 215

第五部 明るく賢い母

I 母の理性的な愛

1 親が持つ心構え 225／2 子のほめ方・叱り方 237

Ⅱ 母は太陽である

1 母は唯一のもの 247／2 父親の存在 255／3 母は明るい太陽 262／
4 理性的な判断 268／5 平凡な中に「誠実性」を 272／6 まとめ 274

装
画
磐
広

第一部

迷信十三章

1 物的環境を豊かにすれば

子供は育つという迷信

正君の場合

正君の部屋は二つあります。一つは寝室と食堂を兼ねた部屋で、もう一つは勉強部屋です。

寝室と食堂を兼ねた部屋には、中央にベッドが置いてあり、その周囲に冷蔵庫や小さなテーブル（食卓用）があります。そしてその冷蔵庫の中には、コーラからはじまって、彼の好きな飲みものや食べものがいっぱい入っています。したがって彼は好きなときに、いつでもこれらを飲んだり、食べたりする生活ができます。

勉強部屋を見ますと、大きな机といすが中央にあって、左側の大きな本棚には百科事典からはじまって、全教科の参考書や問題集などがそろって入っています。机の上にはカセット・テープレコーダー。そして右側には大きなカラーテレビ、後方にはステレオ、その横には漫画が山積みになれています。さらに、机と本棚の間にはエレキ・ギターとその付属品といったものが置いてあります。

つまり、この部屋には、現代少年が欲しがるようなものはなんでもあるのです。

したがって、彼は家に帰ってきたら、何も不自由することはありません。テレビは好きなだけみられるし、音楽はレコード、ラジオ、テープなどで、すばらしい音をこれも好きなだけ聴けます。そして、漫画もまた沢山あるという状態です。

さらに、二つの部屋は冷暖房付ですから、この点でもいつも快適な気分でいられるようになっております。いわば、これ以上は望めないほど、物的環境としてはデラックスな生活を送っているのです。

このような環境の中で生活している正君は、さぞかし成績も良く、日常の生活態度もりっぱだろうと思われます。

しかし、実際はその逆で、学校からもらってくる成績は最低で、しかもふだんの学習意欲はほとんどない、といってもいいような状態でした。

また彼は、まるまると太っていて健康そうにみえますが、いつも身体の調子が悪く、体育の時間はほとんど見学でした。

このような調子でしたから、両親は彼の学校の成績をあげようと、家庭教師に週三回もきてもらっておりました。これによって彼の成績は向上するかと思うとそうではなく、前記のような相変らずの成績なのでした。

物的環境と子供の心

いまの大人が戦前戦後に体験した極端な物資の欠乏の頃を思い浮かべれば、正君のような生活はまさに、王様級だ、といってもいいでしょう。

ところで、正君の家庭のように、子供の日常生活を何の不自由もないように整備してあげれば、本人の学習意欲はたかまるものなのでしょうか。物的環境を豊かにし、いたれりつくせりの中で子供を育てれば、それでりっぱな社会人としての心構えが育成されるものなのでしょうか。

わたくしの経験によれば、正君の場合のように、物的環境を豊かにすればするほど、子供たちの心情はますます貧しくなっていくもののように思えてなりません。そして、こういう中で育てられた子供たちは、親や教師がやさしく、愛情深く導こうとすればするほど、横柄になっていくように思えてなりません。

それではいったい、どうすればよいのでしょうか。

2 テレビや漫画を見せておけば

子供は育つという迷信

光子さんの場合

光子さんは何をするにも自分から進んでしようとはしません。学校でも、学習はもちろん、作業をするときも積極的に、張り切ってやるということがありません。たとえば、美術だとか家庭科のように、自分で責任をもって作品を作りあげていかねばならないような場合でも、満足に最後まで仕上げるようなことはまずありませんでした。

それはどうしてかというと、みんなが授業中、作業に夢中になってやっているときも、光子さんはいつも教室の中をブラブラして、あちらへいっては誰かに話しかけ、こちらへいっては油を売るといった調子で、ほとんど、作業というほどの作業をしたことがないからなのです。そして、その教科の先生から注意されたときだけは一時的にやろうとします。しかし、それも長続きせず、すぐまた、あちこちとふらつくのでした。

では、光子さんには才能がないのか、あるいは、性格的に集中力がない子供なのか、というと、ど